四

数日、静かな日々が続いた。

その間に、北国には確かな足音で冬の寒さが忍び寄っていた。

磐音は、富田治部左衛門源昌の富田流道場の朝稽古に通いながら、鶴吉が奈緒の行方を探し出してくるのを待っていた。

朝稽古は、再び神田三崎町時代の佐々木南を始め、門弟たちが磐音との立合いを希望して、二刻の朝稽古など瞬く間に終わってしまう。

「坂崎さん、金沢に当分おられぬか。江戸に戻るにも冬将軍がそこまで来ておるぞ。北国上街道も下街道も厳しい季節を迎えて、江戸への道も閉ざされる」

と南は、稽古が終わるたびに引き止めた。

その朝、稽古を終えた磐音は、富田源昌に奥へ呼ばれた。するとそこでは長尚常老人が茶を喫していた。

「波着寺の門前で斬り合いがあったそうな。斬られたのは、町奉行の森末龝三郎の用心棒どもだ」

さすがに波着寺門前の戦いは知られていた。そして、驚いたことに老人は、過日、藩の名に関わるゆえと口にしなかった名を今朝は、町奉行の盛末龝三郎と言い切ったのだ。

対決が迫っているということであろうか。

「野町連太郎なる流れ者の剣術家を切り捨てたのはそなたじゃな」

「はい。連れの命を助けようと斬り合う羽目になりましてございます。城下を汚しまして申し訳ございません」

「不逞の輩を始末してくれたのじゃ、謝ることがあるものか」

「本日、盛末が城中に呼ばれ、重臣方に御用商人との付き合いなどを問い質される。だが、すぐには決着はつくまい」

盛末には新座者の応援があった。それだけにこの問い質しは、本座者と新座者の暗闘が公の場に出るきっかけ、前哨戦と思われた。

「それをそこもとに言うておきたかった」

長尚常の言葉に磐音は黙って低頭した。すると富田源昌の声が聞こえた。

「坂崎どの、城下で異変が起こるやもしれぬ。そなたは、許婚の身を專一に動かれよ」

本座者と新座者の暗闘には関わるなと、源昌は忠告していた。

「それがし、降りかかる火の粉まで振り払うなとは言うておりませぬぞ」

と言い足した道場主が静かな笑い声を上げた。

この夜、金沢城の大手先には雪が降りしきり、不穏な空気が漂っていた。

城中に呼ばれた町奉行盛末龝三郎を心配する新座者が三々五々と集まり、待機していた。

だが、五つ近くになっても盛末が帰城してくる様子はなかった。すでに半日が過ぎようとしていた。

あちこちに散っていた新座者の若侍たちの動きが慌ただしくなった。

磐音はそんな様子を大手堀の堀端から眺めていた。

時折り、土蔵屋で借りてきた蓑と菅笠を振り払って、積もった綿帽子をばさりと落とした。

そんな物音があちこちから響いてきて、尾坂門に乗り物が現れた。

待っていた新座者から静かな歓声が湧いた。

どうやら盛末龝三ブロウが下城する姿のようだ。

霏々とと降る雪をついて行列は大手堀にかかり、どこにいたか、盛末の用心棒たちが乗り物を固めた。

一行は、御堀端を左回りに進んでいく。

磐音は、堀端から屋敷町の軒下に移動して一行をやり過ごした。粛々と進む乗り物から当主の疲労と安堵が伝わってくるようだ。

さらに一行のあとを新座者の若侍たちがぞろぞろと従っていった。

磐音もまた屋敷まで見送る気の長い行列の後についていった。

すでに道には四寸ほどの雪が積もっていた。

尾崎神社、神護寺の間を抜けて、城の南側を廣坂へとかかる。するとさらに雪が激しく降ってきた。

磐音は蓑から雪を振り払った。そのとき、前方に明かりが点り、怒声が上がった。

「町奉行盛末龝三郎、藩命により即刻町奉行職を解任いたし、屋敷にて蟄居閉門命ず」

新座者の若侍たちが刀の柄に手をかけて雪を蹴立てて走った。

磐音も廣坂を外れて、土手道に回りこんだ。

すると廣坂上には、高張提灯を煌々と灯した加賀藩若年寄に指揮された御番組衆が捕り物姿で道を塞いでいた。

指揮するのは騎乗に陣笠姿の若年寄、安路繁高だ。

その前に立ちはだかったのは、盛末龝三郎の用心棒の一団だ。

さらに新座者の若侍たちが加わり、盛末を守ろうとする一団の数は三十数人になった。

御番組衆は、それと同数か、いくらか覆い人数だった。

その先頭に立つのは、富田治部左衛門源昌のようだ。

「家臣どもに命じる。私闘ではない、藩命である。抵抗するものは藩主前田治雄様に謀反をなす者とみなし、捕縛いたす。散れ散れ、帰宅せえ！」

鞭を突き出した安路が叱咤した。

「構わぬ、押し通れ！」

乗り物から盛末龝三郎の声が響いて、

「謀反をいたす所存か、盛末龝三郎！」

と安路が応じた。

盛末の用心棒たちと新座者の若侍たちが走り出そうとした。

「待て待て、待てい！」

廣坂上から走り寄ってきた騎馬の者がいた。

「おおっ、これは本多様」

若年寄の安路が声をかけた。

八家筆頭五万石の本多家の当主政長だ。

本多家は、譜代衆ではない。徳川家の家臣本多正信の来、正純の弟正重が祖先に当たる。だが、藩主利長が、

「有能なる侍なれば、新座者とて重用するは当然……」

と前田家最高の五万石を与えて遇した経緯があった。いわば、闘争に及ぼうとする新座者の長老が本多だ。

「そこもとら、城下の廣坂を血で汚して、家中に波風を起こす所存か！」

本多政長の叫び声が、吹き付ける雪をも飛ばして響いた。

新座者の若侍たちが躊躇した。

「早々に帰宅して、指示を待て！」

さらなる政長の一喝に若侍たちは刀の柄から手を離して、坂下に立ち去ろうとした。

「新座者を押し潰す策略に載ってはならぬ！」

狂気に憑かれた盛末龝三郎の声がして、乗り物から蹌踉として姿を見せた。

「龝三郎、狂ったか！」

本多の声に町奉行の盛末が抵抗して叫んだ。

「ええいっ、押し潰して屋敷へ駆け戻るぞ！」

まず盛末龝三郎に雇われていた用心棒剣客が、取り締まりの御番組衆に突っ込んでいった。

新座者の若侍たちは、一瞬迷った末に、いったん外した柄に手をかけると剣を抜き差した。

「抵抗いたすものは家中の者とて構わぬ、斬り捨てよ！」

安路の命が再び廣坂に響いて、両者は乱闘になった。

磐音は、雪が降りしきる廣坂での闘争を、富田流の継承者治部左衛門の重厚な刀捌きを見詰めていた。

坂上と坂下、藩命に従う者とそれに抗する者との激しい血闘は、四半時も続いたか。

御番組衆は、前田家の精鋭部隊だ。その先頭に立って治部左衛門が剣を振るっていた。

戦いの序盤、拮抗していた戦いの形勢は、徐々に御番組衆が有利に立った。

「おのれ、それがしが手本を見せてつかわす！」

雪道で裸足になった盛末龝三郎が刀を振るって、若年寄の安路繁高に迫った。

するとその前に富田治部左衛門が立ち塞がり、

「盛末龝三郎、乱心いたしたか！」

と叫ぶと、峰に返した血刀で肩口を叩いた。

盛末はよろよろとよろめくと雪道に倒れこみ、御番組衆が伸しかかるように取り押さえた。

「坂崎様」

すでに廣坂の戦いが収束を迎えようとしたとき、磐音は呼ばれた。

振り向くと鶴吉がいた。

「どうやら奈緒様の行方が掴めましたぜ」

「苦労をかけたな」

磐音は雪を透かして戦いの場を今一度見た。

急速に戦いは静まりを見せて、御番組衆たちが、倒れ伏す新座者の若侍たちに縄を打ったり、怪我をした仲間の面倒を見たりしていた。

「参ろうか、案内を頼む」

鶴吉は雪道を走り出した。

磐音も蓑と笠に降り積もった雪を振り払って走った。

鶴吉が磐音を導いたのは、浅野川の岸辺、母衣町の遊里だ。

「其ほとりは風情青楼は多く、城下の目さへ忍ぶ里……」

と言われた遊里にも蕭蕭として雪が降り、雪洞の明かりに北国の傾城の情景が艶めかしく浮かんでいた。

「観音坂下の玉松楼の楼主は、ここにも料理茶屋とも妓楼ともつかぬ見世を持っていたんで。そいつを探り出すのにちょいと手間を取りました」

と鶴吉の目は雪を透かして、別邸のような一酔楼を見上げた。

通りに面して張見世があるような遊郭の造りではない。一見の客などは揚がれない格式の料理茶屋のようで、ここにも遊女を置いているのか。

土蔵まであるところをみると、名主家を別邸に改装し、それを料理茶屋に転用したものであろう。

門前から玄関口を覗くと、茶屋とも思えぬ慌しさが漂ってきた。

「ともかく踏み込んでみましょうかい」

鶴吉が平然と言うと、手拭いで頭の雪を払った。

広い玄関口に遊女が吸う人呆然と立っていた。

「姐さん方、どうしなすった」

鶴吉が問うた。

遊女たちが振り向き、

「なんだか、分からないよ」

と不安そうな声を出した。

「急に見世をやめるんだと」

磐音は年増の遊女が応えるのを聞きながら、蓑を脱ぎ捨てた。

土間にばさりと雪が散った。

「つかぬことを伺う。こちらに奈緒と申す女が匿われてはおらぬか」

磐音の声に遊女たちが怯えた目をした。

「だれですね、玄関口で騒いでいるのは」

男の声がして、壮年の男が姿を見せた。

大きな顔は役者面といえなくもない。

「こいつが玉松楼の主、足軽の時蔵なんで」

鶴吉は、時造が藩の足軽をしていたと言った。

「呼び捨てにされる覚えはないが、おまえ様方はだれですね」

「時蔵、おめえの頼りの盛末龝三郎は、町奉行職を解かれて、捕縛されたぜ」

「そんなことはありますまい。城をぶじに下がられたと聞いていますよ」

「おう、廣坂で雪を染めての血煙が立って、若年寄安路繁高様の手にあらあ」

「な、なんと」

と吐き捨てた時蔵が、

「盛末様が駄目なら新しい町奉行に喰らいつくまでだ」

とふてぶてしくも言い捨てると、

「おまえ様方はなんですね」

「奈緒どのの行方を追ってきた者だ」

と磐音が答えた。

「おまえ様かね、京からしつこく付け回してきたという侍は」

時蔵の声に、奥から用心棒らが現れた。

「主どの、すまぬが奈緒どのに会わせてくれぬか」

「考え違いをしないでくださいよ。遊女は身売りしたときから妓楼の持ち物、私が京の朝霧楼に何百両を支払って買った持ち物ですよ。昔はお前の許婚だったかもしれないが、今じゃあ、赤の他人だ。とっとと帰りな」

「証文を見せては貰えぬか」

「上段を言っちゃ困る。なんの義理があって、おまえ様に証文を見せなきゃあならないんだい」

用心棒たちがばらばらと土間に下りてきた。

渡世人ばかりの男たちの頭分はどてらを着て、懐に左手を突っ込んでいた。

「うちには雪見酒を楽しんでいる客もおられるんだ。そんなところで騒ごうというのかい」

時蔵が声を張り上げた。

「旦那、ひと暴れしますか」

鶴吉が懐の合口に手をかけた。

「いや、野暮はよそう。出直すとしようか」

と磐音が鶴吉を差そうと一酔楼の玄関から外に出た。さらに門を潜って通りに出ると、七人の用心棒が二人を囲むように従ってきた。

「旦那がそんなお気持ちでも、素直には返してくれそうにありませんぜ」

二人は用心棒たちに囲まれるように浅野川の土手に出た。すると横殴りの雪が吹き付けてきた。

「名残りの雪だ、よくみておけ」

頭分が渋い声で言うと、いきなり磐音の懐に飛び込んできた。懐にしていた左手に合口が光り、磐音の腹を抉らんと伸ばされた。

磐音は剽悍な動きを見て、懐ぎりぎりまで呼び込むと、包平を抜き上げた。

頭分が想像もしなかった迅速の剣が翻って、突き出した左手首を切り飛ばされた。

「うおうっ！」

頭分は絶叫すると、合口ごと切り飛ばされた左手首を抱え込んだ。

白い雪に血が撒き散った。

「野朗、やりやがったな」

手下たちが長脇差と合口を揃えて、磐音と鶴吉に襲いかかってきた。

だが、すでに磐音の手には二尺七寸の豪剣があり、それが縦横に振るわれると一人二人と雪に倒れこんでいった。

鶴吉もまた一人の土手っ腹を抉り、もう一人と渡り合っていた。

「助勢いたすか、鶴吉どの」

四人を倒した磐音の声に、

「なあに、旦那の手を煩わすほどじゃありまえんや」

と答えた鶴吉が、逆手に構えた合口を突き出すように相手の懐に飛び込んだ。

ただ一人残っていた用心棒も合口を横腹につけて、突っ込んできた。

だが、鶴吉の合口が虚空に舞う雪を両断するように翻ったとき、喉首あたりに、

ぱあっ

という血飛沫が上がって勝負が決した。

「お手入れである、神妙にいたせ！」

という声が母衣町から響いた。

二人が遊里に走り戻ると、一酔楼を加賀藩の家臣たちが取り囲んでいた。

そして、加賀蓑を着た黒い影が二人を迎えた。

長尚常だ。

「そなたも一酔楼に辿りついたか」

磐音は黙って頷いた。

「町奉行盛末一派の取り締まりが始まっておる。許婚を探すのなら今じゃぞ。この家の土蔵に女が隠れているそうじゃ。連れていくなら、この騒ぎのうちだ」

「長様、よろしいので」

「直心影流をみせてもろうた礼じゃ、早く行け」

年寄衆の長家の隠居に磐音は頭を下げた。

再び門を潜って雪の庭を土蔵に回ると、槍をてにした役人が二人立っていた。

「そのほうらはなにか」

どうしたものかと迷う磐音の背後から

「この者はよい。しばらく座を外せ」

と命ずる声がした。

「長家のご隠居」

尚常は見張り二人を追いやると顎で磐音に、さあ早く、と命じた。

磐音は一つ深呼吸すると土蔵の扉を開けた。すると二階から明かりが洩れてきた。

四年半余ぶりに尚と再会できる。それも豊後関前から遠く離れた北国加賀金沢の地でだ。

磐音は菅笠を脱ぐと階段に足をかけた。

二階から香りの匂いが漂ってきた。

磐音は一歩一歩に万感の思いを込めて上がっていった。

土蔵の二階が広がった。奥に畳が数枚敷かれ、打ち掛けのようなものを肩から滑らかした女が後ろ向きに文机に向かっていた。

かたわらの燭台がじりじりと音を立てて燃えていた。

磐音は静かに歩み寄ると、

「奈緒」

と呼びかけた。

女がびっくりした風情で体を揺らし、ゆっくりと振り向いた。

寂しげな顔は楚々として美しかった。だが、奈緒ではない。二つ三つ年上の女だった。

「そなたは……」

振り向いた女は納得したように頷いた。

「那尾にございます。そなた様は坂崎磐音さまにございますね」

「さよう、坂崎磐音じゃ。それがし、奈緒どのがここにおると聞いてきたが……」

「京の島原を出たときは、一緒にございました。さりながら、京の出口の大原口で奈緒様とは別れ別れにさせられて、私だけが金沢に連れてこられたのでございます」

「そなたも那尾と申されるか」

「はい、奈緒様とお会いしたとき、不思議な縁と話し合ったものでございます」

（なんと、名前違いの那尾を追ってはるばる北国金沢まで来たのか）

「そなたは、奈緒どのがどこへ連れて行かれたか知らぬか」

「はっきりしたことは知りませぬ。ですが、女衒たちの話の漏れ聞きましたところ、まず江戸であろうと思われます」

「江戸……」

「坂崎様」

那尾が文机の上に置かれてあった舞扇を開いて差し出した。

雪景色の中にぽつねんと娘が立って、空を見上げていた。かたわらには雪を破った赤い実の南天が植えられていた。すでに奈緒のかたわらには磐音の姿はない。

風に問ふ　わが夫はいずこ　実南天

「お持ちください、坂崎様」

「ありがたく頂戴いたす」

と答えた磐音は、

「なんの力にもなれぬが、そなたのことは加賀藩の方々に頼んでおこう」

磐音は長尚常に縋る気でいた。

那尾が半ば諦めたように寂しい笑みを浮かべてうなずき、言った。

「奈緒様との再会を念じています」

「さらばじゃ、堅固で暮らせ」

磐音は那尾に背を向けた。